

芭蕉の人間像から読み解く『おくのほそ道』

—古典に親しむ態度の育成を目指して—

宮久保ひとみ

(山添村立山添中学校)

松川利広

(奈良教育大学大学院 (教職開発専攻))

Reading the poem Oku no hosomichi after understanding the life of poet, Matsuo Basho and his way of thinking

—Aims to improve the attitudes and to familiarise students classics—

Hitomi MIYAKUBO

(Yamazoe Junior High School, Nara)

Toshihiro MATSUKAWA

(School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

要旨：『おくのほそ道』は長く中学校3年生の教材として扱われてきた。一般的に「俳聖芭蕉」は俳諧の芸術性を高めた「漂泊の詩人」と評価されているが、芭蕉の旅は晩年の10年に集中しており、それまでの40年間はあまり注目されてこなかった。農家の次男に生まれた芭蕉の人生は波瀾万丈で、人間像も興味深い。それらを踏まえて『おくのほそ道』を読むことで、人生の岐路に立つ中学3年生がより作品に親しみをもつことを目指して実践した。11月に「芭蕉週間」を設けて中学生向けの本を選定し、読書環境を整えた。また、学習のガイドや視覚教材を作成し、「芭蕉からのメッセージ」という共通テーマで古典の一節を引用しながら論文を書かせ、「15歳の芭蕉論」を編んだ。芭蕉の人生観や句に見られる思いを自らの進路と重ね主体的に本を読み、思考を深めた作品や、俳諧精神に迫ろうとするものが生まれた。人間像に迫ることで作品に親しむという目的が達成された。

キーワード：古典学習 Japanese classical literature study おくのほそ道 Oku no hosomichi

松尾芭蕉 Matsuo Basho

1. 研究の目的

新学習指導要領では、古典学習が「我が国の言語文化を享受し、継承・発展させる態度を育てる」というねらいの下、中学3年生で「親しむ」という文言が示され、今年8月に毎年11月1日を「古典の日」とする法案が可決された。この背景には、若者の古典離れに対する危惧があるようだ。先頃県内の中学生579人を対象に調査を行った結果、毎年家で百人一首をする生徒は11%だった。生徒が家庭で古典に親しむ機会がいかに少ないかという事実がここからも分かる。

『おくのほそ道』は長く中学3年生の教科書教材として扱われてきた。平泉の世界遺産登録や東日本大震災を機に、改めて日本中から作品が注目され、最近では名作を残した芭蕉の51年間の生涯が注目されつつある。しかし、従来の古典学習ではその部分にはあまり

触れられなかった。「俳聖芭蕉」の51年の人生は波瀾万丈で、書簡や門人の書からは魅力的な人間像が浮かび上がる。それらを踏まえて『おくのほそ道』を読むことは人生の岐路に立つ中学3年生にとって意義があると考え、2つの仮説を立てて実践を行った。

仮説1 芭蕉の生涯や人間像を踏まえて読めば、より作品に親しむことができるのではないかな。

仮説2 「作品の一節を引用して小論文を書く」という言語活動を設定することで、主体的な読書活動も促されるのではないかな。

2. 指導について

2. 1. 本校生徒の実態

本校は、26年前3つの中学校が統合されて開校し、

当初は200名以上いた生徒も現在65名である。生徒は生活圏の都合で三重県と奈良県にほぼ半分ずつ分かれ、さらに別々の高校に分かれて進学する。それまで他者とのふれあいも少なく、話したり聞いたりする表現力の不足が見られた。そこで、国語科が中心となって全校体制で表現力の育成に努めてきた。

山添村は伊賀市に隣接し、学校から芭蕉記念館や芭蕉生家までは約15分で行ける。上野城公園には芭蕉の旅姿をイメージした俳聖殿が建つ。本校は毎年「芭蕉翁献詠俳句」に応募し、昨年度と今年度続いて3年生が入賞したが、現3年生21名のうち、実際に俳聖殿を見た生徒はいなかった。そこで、学習が一度きりにならず、今後も芭蕉とその作品に親しんでいけるよう小論文をテキスト等と共に編集させ、小論文は『15歳の芭蕉論』に編むことにした。生徒はこの学習の前に『論語』を学んだ。志学の年に書いた芭蕉論を而立、不惑等、節目の年に読み返してくれたらと願う。

2. 2. 芭蕉の生涯と『おくのほそ道』

芭蕉は農家の次男に生まれ、19歳で藤堂家の嫡男良忠に仕え俳諧を知るが、良忠が25歳で早世したため、仕官を辞し、29歳で俳諧師を夢見て江戸に出る。そこで俳諧宗匠として成功するが、風雅の道を究めるため37歳で深川に移り住んだ。40歳前後には江戸の大火による被災や実母の死を経験し、41歳以降は旅に生き、生涯に5つの紀行文を残した。その最後の紀行文が、最も有名な『おくのほそ道』である。芭蕉はよく「漂泊の詩人」と言われるが、実際の旅は41歳以降の10年間に集中し、「俳聖」という称号に値する業績もこの間のことになる。肖像画も没後、次第に僧形姿の「俳聖」として描かれ、今やすっかり「俳聖」のイメージが定着している。しかし、その人生は波瀾万丈で人間像も興味深い。俳聖のイメージを取り払い、生徒が「人間芭蕉」として芭蕉を統一的に捉えられるように資料を選んだり、教材を開発したりした。

これまで多くの人が芭蕉にあこがれ、論じたり、生き方をモデルにしたりしてきた。けれども芭蕉自身もまた、古人の西行らの生き方をまね、彼らの古典から得た知識を再構築し、自作に結晶化させている。『おくのほそ道』の文章は芭蕉が門人に「舌頭に千疋せよ」と言ったように、声に出して読むと心地よいリズムがあり暗唱もしやすいが、先人の古典を踏まえ省略されている部分も多い。そのため中学生は難解に感じるだろう。しかし、基になった古典を知って読むと、作品の奥深さに気付けるだろう。古典『おくのほそ道』が多くの古典を継承して新たに創造されたという事実を知ること、作品に対する親しみにつながると考える。『おくのほそ道』を学ぶということは、単に一つの古典として継承するだけでなく、それ以前の古典も継承するという意義のある学習だと気付かせたい。

3. 指導計画

3. 1. 指導目標

- ・作者と作品に関心をもって意欲的に文章を読む。
＜国語への関心・意欲・態度＞
- ・文章を読んで人生や自然について自分の考えをもつ。知識を広げ、考えを深める。
＜読むこと（1）ウ・エ・オ＞
- ・芭蕉の立場や当時の置かれていた状況を知り、歴史的背景に注意して作品世界を実感的に捉える。
＜伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ア＞

3. 2. 単元を貫く言語活動

課題を設定し、必要に応じて資料を読み、古典を引用して小論文「芭蕉からのメッセージ」を書く。

3. 3. 評価規準及び〔評価方法〕

国語への関心・意欲・態度	1 作者や作品に興味をもって、様々な文章を読もうとしている。〔読書記録〕
	2 意見交流に意欲的に参加する。〔観察〕
読むこと	1 芭蕉の人生観を捉えそれに対する自分の意見をもっている。〔ワークシート〕
	2 必要な文章を読み、考えを広げたり深めたりしている。〔ワークシート・観察〕
伝統的な言語文化	1 芭蕉の立場や当時の置かれていた状況を知り、歴史的背景に注意して作品世界を実感的に捉えている。〔小論文〕

3. 4. 指導目標を達成するための手立て

3. 4. 1. 「古典月間」と「芭蕉週間」の設定

11月1日が「古典の日」に制定されたことを受け、11月を校内の「古典月間」、芭蕉忌（「時雨忌」現在11月28日頃）後の2週間を「芭蕉週間」とし、全6時間を指導に当てた。司書教諭として朝読書や家庭での古典の読書を奨励し、読み聞かせを行った。

3. 4. 2. テキストの選定

今回改訂された教科書のうち、学校図書の『中学校国語3』が『おくのほそ道』での芭蕉の虚構を交えた創作意図について簡潔にまとめ、冒頭部分と平泉を取り上げ、さらに旅立ちと結びの句を載せていたので、基本のテキストとして用いた。

3. 4. 3. 読書活動の充実

『おくのほそ道』は原稿用紙に直すと三十数枚であると伝え、生徒は「もっと長いのかと思っていた。」と驚いた。「全部読もう」と呼びかけ、初めに古典への抵抗を少なくするため、学校図書『コミックストーリーわたしたちの古典 おくのほそ道』を与えた。この本は冒頭部分や名所は原文と現代語訳を載せ、

その他の部分も忠実に漫画化され、句も載せてある。古典が苦手な生徒にとって、『おくのほそ道』の気軽な入門書となると考えた。

次に、俳人石寒太や歌人佐佐木幸綱らが芭蕉の名言や名句を選んでいる本を3冊示し、そのうちの1冊を選んで読ませた。石寒太の本は団塊の世代を対象として書かれたものではあるが、これから俳句を始めようとする人を意識しており、文章は比較的平易である。佐佐木幸綱の本はやや難解ではあるが、『おくのほそ道』の内容に即して名言を取り上げていて、読む力の高い生徒にとっては読み応えのある1冊である。

- A：石寒太『芭蕉の名句・名言』（易）
B：石寒太『芭蕉の晩年力』幻冬舎（易）
C：佐佐木幸綱『芭蕉の言葉』（やや難）

さらに、山下一海の『芭蕉の百名言』より、人生観や『おくのほそ道』に関連するものを11言選び、必要に応じて読むように補助資料として全員に与えた。

最後に論文作成に向けて解説のある本を3冊示し、小論文で選んだ場所を精読するように勧めた。

- a：「ビジュアル古典文学『おくのほそ道』」
b：「手にとるように『おくのほそ道』がわかる本」
c：「ビギナーズクラシックス『おくのほそ道』」

aは写真が多く掲載され、見るだけでも楽しい。bやcは歌枕の解説や文章の基となった古典の解説も分

かりやすく書かれている。歴史的背景の説明も丁寧だ。その他、芭蕉に関する様々な本を「芭蕉週間」に3年生教室に置き、いつでも読めるようにした。

3. 4. 4. 論文作成に向けたモデル文の提示

これまでの作文指導により、21名の生徒は全員、課題に沿って1600字程度の文章を書くことはできるようになっていたが、「古典の一節を引用して小論文を書く」という学習は初めてである。

そこで、モデルとなる文章を山形新聞社『没後300年芭蕉を〈読む〉』（山形新聞社文化欄が「わたしと芭蕉」と題して著名人49名の論文を連載したものを集成した本）より2つ選んだ。不特定多数の読者を対象とする新聞掲載のもので、義務教育最終年で十分理解できる。1つ目は芭蕉研究の第一人者である井本農一の「虚構のもつ意味」で、芭蕉が理想とする風雅を表すために虚構を交え創作したことを説明している。2つ目は俳人でもある坪内稔典「永遠の旅人の眼」で芭蕉の価値観と創作態度に触れている。1800字程度の長さで、今回指定した小論文の長さに相当する。

3. 4. 5. 学習ガイドの作成

学習の意義や進め方を示したガイドを作成した。

3. 4. 6. 補助資料の作成

- ①「芭蕉年譜」から、芭蕉の人生の転機を考えさせた。
②村松友次の『芭蕉の書簡』を抜粋して与えた。
・明石を訪れ、平敦盛の石塔に涙を流したという手紙。芭蕉は判官最良で源義経にも心を寄せている。

2 学習の進め方	
学習目標	* 必要に応じて本を読み進め、記録を書いていく。
1 学習目標を確認し、テキストで旅の概要と芭蕉の創作意図を捉えよう。芭蕉の人生の旅に対する思いを読み取ろう。	
2 芭蕉の年譜から人生の転機を考えよう。『対話タイム』手紙等から芭蕉の人物像を想像しよう。『対話タイム』	
3 歴史的背景を踏まえて、平泉の部分を読み、地の文と宛名の関係を考えよう。芭蕉の思いを捉えよう。	
4 平泉やその前後の部分を読み、平泉の表現の工夫について考えよう。	
5 集めた材料を整理し、小論文の下書きをしよう。	
6 小論文を推敲して仕上げよう。『文集』に仕上げる予定。	

江戸時代、芭蕉は農民の次男に生まれ、また、もし長男だったら、「俳聖」芭蕉は誕生していなかったであろう。様々な困難に打ち勝ちながら、俳業を残した芭蕉の人生や人間像を知って、『おくのほそ道』を読むと、作品がもっと身近に感じられるのではないだろうか。さて、それではみんな『おくのほそ道』の旅に出かけよう。

- ①人間関係形成・社会形成能力：兄や門人との手紙から面会見の良し、人々に厚い人であったことが分かる。門人の文章からリーダーシップに富む人物像が浮かび上がる。弟子の地位や人柄は様々で、多様な他者考えや立場を理解できた。だつた。
- ②自己理解・自己管理能力：俳諧宗匠として成功するが、風雅の道を究めるための四十一歳から旅に過ぐし紀行文を残す。今後の自分自身の可能性を肯定的な肯定の理解に基づき主体的に行動し、自己を研鑽する力がある。
- ③課題対応能力：従弟の考えや方法にとらわれず、持事を前に進め、蕉風俳諧を確立した。
- ④キャリアプランニング能力：俳諧宗匠を夢見て江戸に出て成功し、その後は俳諧の求道者として、自ら主体的に判断し、キャリアを形成していく力がある。

しかし、「人間万事蜚蜚馬」といように、芭蕉の人生も多難だったが、それを受け入れ、結果として私たちに『おくのほそ道』を残してくれました。その芭蕉の人生を、キャリア教育という側面からみると、非常に興味深いことが分かります。「キャリア教育とは」「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てる」としてキャリア発達を促す教育のことといひ、キャリア発達とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を指します。

①人間関係形成・社会形成能力：兄や門人との手紙から面会見の良し、人々に厚い人であったことが分かる。門人の文章からリーダーシップに富む人物像が浮かび上がる。弟子の地位や人柄は様々で、多様な他者考えや立場を理解できた。だつた。

②自己理解・自己管理能力：俳諧宗匠として成功するが、風雅の道を究めるための四十一歳から旅に過ぐし紀行文を残す。今後の自分自身の可能性を肯定的な肯定の理解に基づき主体的に行動し、自己を研鑽する力がある。

③課題対応能力：従弟の考えや方法にとらわれず、持事を前に進め、蕉風俳諧を確立した。

④キャリアプランニング能力：俳諧宗匠を夢見て江戸に出て成功し、その後は俳諧の求道者として、自ら主体的に判断し、キャリアを形成していく力がある。



4. 1. 2. 指導の流れ（全6時間）

次	時	■学習目標○学習活動	・教師の支援
1	1	■ガイドやテキストを読み、学習目標を立てる。 ○テキストで作品の概要と芭蕉の創作意図を知る。	・虚構を交えて創作した事実を知らせる。
	2	■資料から芭蕉の生涯や人間像を捉える。 ○芭蕉の人生の転機はどこにあった話し合う。 ○書簡や名言から分かる人間像について話し合う。	・年譜や書簡等から得た知識を交流させる。 ・論文のテーマの方向性を意識させる。
2	3	■冒頭部分より芭蕉の人生観を捉え、旅立ちと結びの句を鑑賞する。冒頭部分は暗唱する。 ○芭蕉の人生観や旅への思いを確認し、「行く春」と「行く秋」を照応させた効果について考える。	・時を旅人とする感覚や現在の旅との違い、旅の終わりが始まりだと気付かせる。
	4	■歴史的背景に注意して平泉の部分を読む。 ○奥州藤原氏と源義経などの歴史を踏まえて読む。 ○芭蕉が500年後に実際に見た風景を捉え、句を鑑賞する。	・写真や文をスライドで見せ芭蕉の思いを実感的に捉えさせる。 ・論文の材料は随時メモするように伝える。
	5	■自分のテーマに沿って論文の下書きをする。 ○資料を確かめ、引用する材料を整理して書く。	・材料を吟味して書かせるようにする。
3	6	■小論文を推敲し、清書する。 ○小論文を推敲し、清書する。	・芭蕉の推敲過程について説明する。

事後指導

テキストは白色、ガイドはピンク色などと色分けし、論文を加えて各自で製本させた。また、論文集には互いの論文を読み、寄せ書き風にコメントしたものも綴じさせるようにした。

5. 研究の成果と課題

5. 1. 生徒の小論文に見られる思考の深まり

全員が古典を引用して、字数を満たした論文を書き上げることができた。その一部を抜粋して示す。

①芭蕉の人生観に触れ、自分の進路を考えたもの

S 1「芭蕉の生き方から学ぶ」

私が芭蕉に出会ったのは小学五、六年生のころ。冒頭部分を暗記した。「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり」芭蕉の旅に出た動機のすべてがこの一文に込められている。つまり『おくのほそ道』の冒頭から「人生は旅である」とズバリ言っているのだ。私はこの文に驚いた。旅という先の見えないものを人生にたとえ

ているのは、将来が不安定なのではないかと思った。私にはまだ将来の夢がない。しかし、『論語』に「人遠き慮りなれば必ず近き憂ひあり」というように、明確でなくても先を見通すことが大切だと思っている。（中略）人生を「旅」だという芭蕉を、本当に「志」の強い人だと思った。

②人生の転機に触れ、芭蕉の思いを見つめたもの

S 2「芭蕉と平泉」「夏草や兵どもが夢の跡」

夏草がゆれる平泉の地に立ち、芭蕉の心は「はかなさ」が広がっていただろう。どんなに栄えていても、「終わり」は必ず来て、そしてはかない。

平泉の風景がそう語っていたからだ。芭蕉は過去にもそういった感情を持ったことがある。芭蕉が若かりし頃仕えていた主君良忠の死、そして、母の死である。この二つの出来事は芭蕉の人生の転機である。良忠の死の後には、俳諧師を夢見て江戸に出て、母の死後には新しい俳諧を生み出すため、旅に出るようになった。しかし、平泉での「はかなさ」は前文の二つの「はかなさ」とは違っているのではないかと私は思う。芭蕉が『おくのほそ道』に出たのは五十歳少し前のころ。『論語』の教えであれば「知命」つまり「与えられた務めを知る」という年である。芭蕉の場合その務めは「旅をする」ことであった。（中略）芭蕉が平泉で感じたはかなさ。それは、芭蕉自身の「終わり」つまり「死」を予感させるものではないだろうか。

③芭蕉の創作態度に触れ、句を深く鑑賞したもの

S 3「行く」「蛤のふたみに分かれ行く秋ぞ」

芭蕉は満足できなかったのであろうか。何年もかけて『おくのほそ道』を推敲し、そして完成へともっていった。もう五十になろうかというときに旅をした。まだまだ死なずにがんばるぞ、という意味の「行く」だったのだろうか。それとも「時は私を置いていってしまふ」という意味の「行く」だったのだろうか。芭蕉は前を見つめながらも、しっかりと後ろを見つめ直せる人であった。私はどこまで行けるかわからない。だが、行けるまで俳諧と共に歩もうと思う、という意味であったのか。ここまでは曾良との二人旅であったが、推敲という道は一人で進まねばならぬ。いつもなぜか寂しい気持ちになる秋。芭蕉はそんな秋に向かっていこうという強い意志を持っているようだ。（中略）芭蕉の句は不思議で、読む人それぞれの捉え方がある。しかし、どれをとってもすばらしいものであることは変わらない。芭蕉が愛されているのはそういった理由からかもしれない。

④句と自分の進路とを重ねて考えを深めたもの

S 4「旅立つ日に」「行く春や鳥啼き魚の目は泪」

私もこれから親しい人と別れて自分の決めた道

を歩むのはとても不安だ。(中略)旅に出る一歩はだれだって不安に感じると思う。それでも芭蕉は新しいことに果敢に挑戦する。私は高校に進学して芭蕉のように新しいことに果敢に挑戦できるだろうか。(中略)どの旅立ちの日にも少しも不安がないことはなかっただろう。それでも自分の可能性を信じて旅を続けたのはすごいと思う。私は芭蕉に旅立ちの日は不安だけれど、自分の可能性を信じて進めばいいと教えられた気がする。

⑤芭蕉の人生から見て俳諧師芭蕉を評価したもの

S 5 「松尾芭蕉の美意識・価値観」

彼は「風雅」という言葉を度々使っている。上品で趣のあるといったような意味だ。しかし私は、彼が理想としたものと「風雅」は少し異なると感じた。青年期の学友、母との死別といった苦しい経験、西行法師の存在、そういったものが彼の美意識・価値観となり、彼が求めた「風雅」そのものになったのではないか。(中略)常に高い美意識をもち、自分の目指すものをもっていたからこそ、松尾芭蕉は西行法師の二番煎じにならず、常に俳諧を新しいものにしていったのではないか。

S 1 は、小学校の学習を振り返り、『論語』も引用して自分と比べて書いた。S 2 はこれまで筆の遅い生徒であったが、書き始めると一気に進め、授業の感想も一番に提出した。そこには、「先生の松尾芭蕉の本の多さにびっくりした。」という言葉と共に「みんな芭蕉の句について、芭蕉はどんな心情だったのか、また、自分の意見を深く深く書いていた。」とあり、彼女の目にも今回の学習は、全員が真剣に芭蕉と向き合い、思考を深めた学習だと映ったようだ。S 3 は想像力を広げて句を鑑賞した。S 4 は特別支援学級の生徒で、未知のことに対する不安が強く3年生になって私の授業に入れるようになったが、1学期は作文が書けず、不安で授業に出られないこともあった。が、彼女は小論文の手引きを基に自分の不安な心情を吐露し、芭蕉に励まされたことを書き上げた。これらは昨今重視されるキャリア教育の理念とも通じるものがある。S 5 は多くの本を開き、私があえて置いた加藤楸邨らの難解な芭蕉論を「布張りの本は中身が重いよ。」と周囲を笑わせながら辞書を片手に語彙を増やした。

5. 2. 生徒の感想や授業の様子に見る見た変容

学習前は大半の生徒が芭蕉は人生の大半を旅に生きたと思っていたが、全生涯を知り困難の度に「常に己を高めようとした人」「自身の俳句のレベルアップを積極的に行っていた人」と人生を肯定的に生きた人物だと認識した。「何を書けばいいですか。」という生徒も出ず各自課題を見つけ、書き上げた表情は達成感に満ちていた。そして、授業後の感想に「芭蕉について深く知ることができて良かった。」と書いた。

中学3年生の国語は週3時間であるが、「芭蕉週間」を設け、読書環境を整えたことが主体的な読書を促し、ガイドや視覚教材を作成したことで、これまでの学習にはない思考の深まりが見られた。芭蕉のように「杖」を用意したことで、21人が自力で結びにたどりついた。それには「俳聖」という称号を外し、魅力ある人間像を見つめるという「旅立ち」が作用したと考える。特に『おくのほそ道』の場合、人間像を知ることは作品に親しむことにつながると確信した。限られた時間で推敲を重ねる生徒の姿は芭蕉の姿を連想させ、感慨深かった。これからの新しい古典学習の1つの手法として提案したい。

引用文献

- ・柳川創造『コミックストーリー わたしたちの古典 ⑩新装版 おくのほそ道』学校図書 2002 p.143
- ・井本農一他『日本の古典をよむ20 おくのほそ道 芭蕉・蕪村・一茶名句集』小学館 2008 p.317
- ・井本農一『芭蕉入門』講談社学術文庫 1978 p.218
- ・楠本六男『芭蕉と門人たち』NHK出版 1997 p.381
- ・山形新聞社編集局編『没後300年 芭蕉を〈読む〉』三一書房 1994 p.260
- ・石寒太『芭蕉の名句・名言』日本文芸社2007 p.231
- ・上野洋三『芭蕉、旅へ』岩波新書 1989 p.240
- ・上野洋三『芭蕉の表現』岩波現代文庫 2005 p.354
- ・村松友次『芭蕉の手紙』大修館書店 1985 p.262
- ・関屋淳子『ビジュアル古典文学「おくのほそ道」』ピエブックス 2010 p.237
- ・石寒太『求めない生き方 芭蕉の晩年力』幻冬舎 2008 p.247
- ・佐佐木幸綱『芭蕉の言葉』淡交社 2005 p.249
- ・加藤楸邨『芭蕉の山河』1982 p.349
- ・伊藤博之『西行・芭蕉の詩学』2000 p.305
- ・櫻井武次郎『奥の細道の研究』和泉書院 2002 p.388
- ・堀切実『芭蕉の門人』岩波新書1991 p.264
- ・額原退蔵 尾形竹次郎訳注『新訂おくのほそ道』角川書店 1967 p.352
- ・山下一海『芭蕉の百名言』角川ソフィア文庫 2010 p.334
- ・長尾剛『手にとるように『おくのほそ道』がわかる本』かんき出版 2002 p.234
- ・講談社『奥の細道の旅』講談社 1989 p.155

参考文献

- ・学校図書編集部『中学校 国語3』学校図書 2012
- ・上野洋三『芭蕉論』筑摩書房 1986